特　別　活　動

1．研究テーマのとらえ方

(1)　はじめに

特別活動の指導に当たって「豊かな感性を育む」とは，人間，自然，社会，文化などとの関わりを通して，①「身の回りにおいて，今何が課題であるかを見抜く感覚」，②「物や事象から感じたことを表現し実践化する力を育てること」，③「集団による実践活動を通して，好ましい人間関係を育成し集団への所属感を深め，自主性・社会性を養う」であるととらえている。

子ども達は，日々生活のなかで「よりよく生きたい」，「より向上したい」という欲求を持っている。この望ましい欲求が，子ども一人ひとりの生き方や考え方，夢や希望などの思いや願いに基づいて生かされる過程を経ることにより豊かな感性は育まれる。そのためには，児童の内発性を重視した活動の場を設定する必要がある。そして，子ども自身の実践力を育てるため，その目標，方法，活動が可能な限り児童自身によって考えられ実践されていかなければならない。すなわち自主的であること，実践的であることが望ましい集団活動を支える基本でなければならない。それは，子ども一人ひとりの中に豊かな心が育まれる過程でもある。

(2)　豊かな感性を育む特別活動

子どもはだれでも，教師や友達から自分のよさを認められ，集団の中でよりよく生きたいという願いを持っている。この願いを大切にして，一人ひとりの子どもの豊かな自己表現をめざすように進める事が大切である。そのためには，所属するさまざまな集団のなかで，役割を分担したり自分の考えや意見を友達に発表したりして互いによさを認め合い・高め合う必要がある。さらに，子どものよさや可能性は上記の集団のなかで他の子どもと関わることによるほか，人間，自然，社会，文化などのよさとの関わりを通しても高められ豊かに育まれると考える。

また，豊かな感性を育むためには，支持的風土を培っていきたい。特別活動において大切なことは，一人ひとりが本音を出し合い，それを基に譲り合い・調整，さらに新たな解決方法を皆で考え出す過程である。このような学

級経営・学年経営を積み重ねていかなければならない。

(3) 家庭や地域と結びつく活動

子どものよさや可能性を生かし，自主的な活動を促すためには，学校で設定された時間や空間では不十分である。集会活動では，計画と実施は学校で行われるが，いろいろな準備は放課後の時間を使ったり，家庭において行われることが多い。委員会やクラブ活動，学校行事においても学校だけでなくもっと活動場所を広げ，家庭や地域と結びつく必要がある。例えば，子ども達が，放送番組の編集を家庭の機器を使って行ったり，地域の図書館で本や紙芝居を借り受けたりするなどである。また，クラブの指導者として保護者や地域の方を学校に招く等である。このように活動の場を広げることにより子どものよさや可能性が発揮され，主体的な活動が展開されると思われる。

(4) 豊かな感性を育むための教師の支援

子どもの内発性を重視し，主体的な活動が尊重されなくてはならないが，そのことは子どものなすがままという放任とは全く違うことである。子どもの思いに任された活動は，いずれ一人善がりの活動となったり，マンネリ化のために行き詰まり，ついには意欲をなくしてしまう恐れがある。教師は，子ども達の活動を暖かく見守りながらも人間関係や活動内容において視野を広げるための支援や，必ず活動を振り返らせる場を設定ることが必要である。学級活動において，「楽しいことはやりたがるが，身の回りの課題に気づかない」という声を聞くが，教師は，今学級において課題は何であるのか，子ども達の発達過程においてどんな働きかけが必要とされているのか，ということをつかんでいなくてはならない。なぜなら，子ども達の思いが個人レベルで留まり集団レベルへと発展しない場合があるが，そのまま放置されればこの思いが時間の経過とともに色あせてくるからである。このチャンスを逃がさないように子ども達に働きかけなければならない。子ども達のサインを受け止める方法として，子ども達の日常の行動の観察，アンケートや議題箱の活用，さらには朝・帰りの会での話合いや日記などが考えられる。また，他教科の教師とも連携をとり子ども達の生活の様子をつかむ態勢も必要である。

学習のステップ	支　援　の　手　立　て
気づく・感じる	◎身の回りの諸課題に気づいたり，温かい心の交流が生まれるような場の設定をする。 ・アンケートの実施や議題箱の活用により，子ども達が主体的に活動内容を見つけ出していくことができるようにする。 ・子どもの日常生活の観察，朝・帰りの会での話合い，日記などにより課題を見つけ，計画委員会へ提案する。 ・計画委員会・計画係などを中心にして，子ども自身の手によって学期ごとの活動計画が立てられるよう話合いの場を設ける。
計画を立案する	◎子ども達のよさや可能性が発揮でき，期待感が持てるよう活動のねらいを焦点化する話合いの場を設ける。 ・これまでの反省を基にねらいにあった計画を立てる場を設ける。 ・運営・進行などの手順を事前に打ち合わせる場を設ける。
実践する	◎話合いも含め，子ども同士の人間的なふれあいの場を確保する。 ・五感をフルに働かせて，全力で体当たりしていけるような活動を大切にし，子ども相互の高め合いに活動のポイントを置く。
振り返る	◎自分自身や友達のよさを感じ，一人ひとりが達成感や新たなる課題が持てるようにする。

(5)　おわりに

「豊かな感性を育む特別活動」を研究テーマとして取り組み，実践を積み重ねてきた。校内授業研究では，第１年次，第４学年の児童を対象に「昔遊びをしよう」の実践研究に取り組んだ。伝統文化のよさに積極的に関わることを通して，子ども一人ひとりのよさが発揮された学級活動であった。第２年次，第１学年の児童を対象に「友だちのいいところをさがそう」の実践研究に取り組んだ。友達の似顔絵当てクイズの活動を通して，友だちのいろいろなよさを見つけ合う学級活動であった。第３年次，第４年生の児童を対象に「私たちにできること」の実践研究に取り組んだ。子ども達の「自分たち

が使うところを気持ちよく」という日常生活の様子から範囲を学校外の公共施設へと視野を広げる学級活動であった。これらの実践研究の取り組んだ成果として，次の３つが挙げられる。

①価値ある教材と関わることにより子ども一人ひとりのよさが発揮される。

②友達のよさに着目した題材が支持的風土づくりに大きな力となる。

③子どもの「よりよく生きたい」という欲求や，今伸びようとしている面を見逃さず活動を仕組めば子どもは生き生きと成長する。

以上の点から，子ども一人ひとりのよさが認められ，豊かな感性を育む特別活動の方向性を明らかにしたものと言えよう。しかしながら，人間，自然，社会，文化面において価値ある教材の発掘の難しさ（単発に終わり継続しにくい）や，子ども達の主体的な態度の系統的な育て方，身の回りの諸課題への気づかせ方が問題点として残った。これらの点を踏まえ新しい学力観に立つ特別活動のあり方を追究していきたいと思う。